

知恵の樹

No. 131 2008. 6. 11

町田の図書館活動を
すすめる会

事務局：町田市森野 3-1-12 増山方

〒194-0022 FAX042-722-1243

図書館とのかかわりを顧みる

～図書館長から 公民館長に異動して～

手嶋孝典

本年4月の人事異動で町田市立図書館から町田市立公民館に職場が変わりました。図書館には、3年間の市長部局への出向(このとき、職場で異動内示撤回の運動に取り組んでくれたことを今でも感謝しています)を挟んで、通算25年にわたり在職しましたので、多くの感慨があります。

司書講習を受講したことで、図書館の仕事はずっと続けたいと考えるようになったのは、私にとって転機となりました。中央図書館の開館準備に携わることができたことも、図書館サービスを考える上で大いに勉強になりました。でも、何よりも浪江度先生との出会いが、私の人生を変えてしまったのです。

なぜそうなったのかをうまく説明するのは、ちょっと難しいのですが、浪江先生が図書館運動に精力を注いでいるだけでしたら、それほどの影響は受けなかったと思います。先生の図書館運動の背後には、主権在民＝住民自治という視点が常にありました。自治体に就職して10年近くを過ごし、何をしたらよいかを模索しながら、試行錯誤を繰り返していた私にとっては、まさに目から鱗が落ちる思いでした。

図書館運動の展開を地方自治確立のための住民運動と結び付けた先生の実践は、戦前の農民運動に端を発したのですが、それが形を変えて町田市立図書館のみならず、全国の図書館の発展に大きく寄与しました。先生にとっては、地方自治を確立するための運動の具体的な方策が、図書館運動だったと思います。それは、農民運動の挫折、2度の

獄中体験から導き出された壮大な構想であり実践でした。

その薫陶を受けた私は、先生が助言者として参加されている組合の自治研(地方自治研究集會)運動に積極的に関わるようになり、それがきっかけとなって、本会の前身である「町田市立図書館をよりよくする会」が誕生しました。これからの住民運動は、図書館づくりの要求運動にとどまることなく、どのような図書館が欲しいのか、更には、自治体の図書館政策を作る主体となるべきだと、その当時いっぺんに考えたわけではありませんが、少しずつ考えるようになりました。

そのためには、図書館の利用者・住民に対して情報を公開することが必要なはずですが、中央図書館建設過程での住民参加は、ささやかではありますが、そのような発想の下で実現しました。管理職になってからは、情報公開の徹底について、図書館協議会に対しても同様に考え、実践してきたつもりです。

今や常勤職員とほぼ同じ業務をこなしている嘱託員の処遇改善、労使が合意し、人事当局とも具体的な話を詰めてきた専任司書職制度など、やり残した課題はたくさんありますが、後任の守谷館長に委ねます。

今後は、本会の会員として、町田市立図書館の発展に少しでもお役に立てればと考えています。

長い間お世話になり、ありがとうございました。

(本会会員)



「ひらこう！ 学校図書館」

日時 6月21日(土) 10時40分～16時30分
場所 日本図書館協会2階研修室

学校図書館を考える全国連絡会は、10時からの総会に引き続き、10時40分から、塩見昇氏(日本図書館協会理事長)を講師に迎えての記念講演、午後からは実践報告、意見交流・情報交換が行われた。参加者が112名を数える盛況で、全国から多くの人が集う1日となった。以下に簡単に報告する。(水越)

「学校図書館法改定から10年

— 学校図書館のいま、そしてこれから—

塩見 昇

1997年の法改正

長い間の懸案事項であった学校図書館法が1997年に改定され、当分の間！置かなくてもよいとされていた司書教諭が、12学級以上のすべての学校で設置することに法制化された。当時の状況を振り返ってみると、1990年代半ばから学校図書館整備5ヵ年計画が始まり(現在は3期目)、地方交付税措置による学校図書館蔵書の充実が少しずつ図られるようになってきた。また1996年の中教審答申で示された「これからの学校像」に、一方的に教えこまれる教育ではなく、児童・生徒が自ら学び、自ら考える、いわゆる「生きる力の育成」が21世紀に向けた教育目標と位置づけられていることから、児童・生徒が主体的に学ぶ場としての学校図書館の重要性が示された。これらを踏まえて学校図書館の整備充実が課題として認識されるようになり、学校図書館に人がいなければならない、さりとて急な教員増は財政的にできない、ならば今いる教員の中から司書教諭を発令し、それに充てようという、いささかその場しのぎの政策だったといえよう。

当時はまたコンピュータが飛躍的に普及してきた時代で、来るべき情報化社会への適用も緊急課題としてあり、情報教育をどうするかという思惑も働いたようだ。法改正当時は司書教諭にこの情報教育を担わせるといふ期待もあったようだが、10年経った今、そうしたこと

はまったく言われない。

法改正から10年

97年の法改正により、確かに12学級以上の99%に司書教諭が発令されてはいるが、実態は全国の小・中学校の約半数が12学級以下の小規模校であり、こちらでの発令は20%前後に留まっている。つまり全体で見れば、小40%、中43%は未発令のまま置き去りにされているのが実状だ。一方の学校司書(学校図書館担当職員)の設置状況は、司書教諭発令によって学校司書配置が妨げられるという危惧があったにもかかわらず、実際はそれぞれの自治体の努力や市民運動の成果もあり、この10年でも着実に増え小・中とも約37%にのぼっている。ただし正規職員は非常に少なく、3割以下となっている(08年4月文科省発表)。国立の小・中学校ですら学校司書が正規職でないという点が、象徴的である。

法改正から10年経った今、全国には司書教諭のみ、司書のみ、両者がいる、だれもいない、という4種類の学校図書館が混在しており、特に2職種併置が単純計算で1/6校にあるという状況がみてとれる。

全国学校図書館協議会の機関誌では、改正から10年を振り返って「一步前進と捉える」総括もあるが、他方「法改正は悪夢だった」という学校司書の声もある。特に高校の現場では司書教諭の発令を機に、学校司書に司書教諭への移行を半強制するような実態もあり憂慮される。

司書教諭を置く・置かないの線引きが12学級というのはいかにも実態に合わず、特に地方に小規模校が

多いこと、校長による口頭での発令であること、実際には時間軽減がほとんどなされていないなどの現状をみる限りでは、まだまだ過渡的存在とはいええるが、10年を経て司書教諭不要を唱える人はもはやいない。学校図書館に二つの職種が混在した状況が当分続くと思われる、むしろ大きな課題は役割や待遇の違う二者の連携にある。さまざまな問題を抱えながらも大きく見れば、学校図書館が教育の場に根付く芽となってきたといえるだろう。

近年論議的になっているのは学力低下問題で、PISA 読解力の結果などから「ゆとり教育」の見直しや指導要領改訂が相次ぎ、教育の方向はまた大きく揺り戻されている。自ら考え学ぶ主体的な学習は学校図書館と親和性があるのだが、残念ながら現在はやや逆方向の流れになりつつある。

しかし読書推進の面だけは、「文字・活字文化振興法」制定や「2010年国民読書年」の決定など、ますます盛んになっている。

「人」をめぐる現況と課題

以上見てきたとおり、現状は様々な課題を孕んでいる。99年に「学校図書館問題プロジェクト・チーム報告」を表したが、そこで示したように、将来的には教育学と図書館学を修めた学校図書館専門職員を新たに配置

する制度が望ましいと考えられる。しかし二職種併置という現状を考えれば、司書教諭と学校司書ができる限りしっかりした中身と制度的根拠を備え、対等な協同の関係を築いていくこと、実践と交流を強めることが必要であろう。

午後の部

調布市立杉森小学校の東翔子氏(司書教諭)と渡辺千津子氏(学校図書館専門嘱託員)による実践報告、各地からの報告、そしてアピール文採択と盛りだくさんであった。杉森小学校の実践報告は、教員になって3年目という初々しい司書教諭、狛江市から調布へと転戦しながら実績を積んだ、まさにプロといえる司書との中身の濃い楽しい報告で、塩見氏の講演にあった「協同の関係」の現状での理想形を見る思いがした。

アピール文は、ここ10年で明らかにされてきた問題を網羅する形で、特に「専任・専門・正規の学校司書配置」と「11学級以下の学校での司書教諭配置」、また教育への財政措置を強く要求する内容で、全会一致で採択された。遠く長崎や岡山からの参加者もあり、学校図書館に寄せる全国の熱い想いと、こうした会の必要性を痛感するものであった。

事業仕分け —効率的・効果的な行政の実現を目指して！— について

7/1付「広報まちだ」にも発表されましたが、「事業仕分け」とはハテ何だろうと感じた方も多かったのではないのでしょうか。これは、町田市が外部の視点から市の事業の必要性や効率性について評価を行い、それを踏まえて市政運営に反映させるというもので、公開の場で行なわれます。

対象事業は2008年度予算の経常事業で市負担額が大きい順に各部から抽出され、今回、市立図書館貸出事業もそれに挙げられています。

評価者はNPO法人「構想日本」(サイト <http://www.kosonippon.org/index.php>)で、すでに多くの自治体で事業仕分けに関わり、市政の見直しを図っているようです。浜松市・高島市などの市サイトにその結果が載っています。また最初は「構想日本」が仕分けに携わり、その後市民が評価者となって2度目3度目の仕分けを実施している自治体もあります。

仕分け作業は、1事業30分程度の割り当てで、図書館については館長が事業説明を行い、その後質疑応答を経て評価(廃止、継続、見直し etc)されます。仕分け作業は公開ですので、市民も傍聴できます。

実施日 7月26日(土) 町田市文化交流センター(旧ぱるる)5F、9時～17時

詳しい時間は後日発表されますが、ぜひたくさんの方の市民も傍聴にご参加ください。

日時 5月25日(日) 14:30~16:10 場所 中央図書館6階会議室

出席 14名：市川・上平・小寺・清水・志村・谷釜・谷藤・田村・丹羽・野角・丸岡・
水越・村田・森（市側：石阪市長・田中秘書課長・小泉指導課長・守谷図書館長）

前号(P7)で簡単な報告をした「市長との懇談会」についての詳細をお知らせする。

この懇談会は、市内で活動する市民団体などを市長が訪問し、意見交換をするという企画の一環として実施されたものである。先ず会の目的や活動歴、町田の現状について簡単に報告し、その後会員それぞれが自己紹介も兼ねて、学校図書館の重要性と学校図書館に寄せる想いを語り合う形で進められた。市長も前半は少々緊張した？ご様子であったが、話が進むほどに打ち解けられた。まずは目的の第一歩、学校図書館を大切に思う人がこんなにもたくさんいるということは、市長にご認識いただけたのではないだろうか。しかし短い時間であったため、参加者全員が思う存分語り尽せたとは言いがたい。ここには抜粋でしか載せられないので前後の文脈の曖昧な箇所もあるかと思うが、ご勘弁を。

<市長=● 会員=★>

●市長の話から：本が周りに無い時代だったとかで教科書以外読んだ記憶が無いとおっしゃる。しかし、日曜学校で聖書を読まれたとか。お子さんには、寝る前に昔話の絵本などの読み聞かせをされたそうだが、やはり子ども達も本は読まず、畑や山で遊んで過ごしたとのこと。40代になってから、『ナルニア』を全巻読んだが、本は買って読むものだと思っていた。市長の職につく前は、野鳥の会の指導員をしていた関係で子どもや大人に鳥の話をするのがあり、その関係の知識は本から得ていたとおっしゃる。最近感じておられることとして、筆算しないで電卓で掛け算をしたり、ナビを使って運転している場所を知ったり、Wikipediaで情報を得ることなどは、プロセスを省略して結果に辿り着くことになるので、かなり危険だということで、ご自分でも、こういう会に出席し、人と接することで危険を回避する努力をされておられるとのこと。読書傾向については、村上春樹、高橋治、高村薫などの作品を読まれるとおっしゃる。

町田市の組織の中で、部長の仕事がボーナスに跳ね返るようになったが、まず、目標を立てることが大事だとかで、例えば、この会の今後の目標は「学校図書館の充実と発展」となっているが、これはどういうこ

とか？「より一層求める」ということは、今までも発展していたことになるので、こういう書き方は目標にならないのでブレイクダウンして下さい、となる、と経営論を話された。そして、本日の配布資料「多摩地域学校図書館職員配置状況一覧表」をご覧になり、町田は1日2000円だが、これは時給換算できないからこうなっているんだな、とおっしゃった。

★町田市の図書指導員の謝礼が時給表示にできないほど低いということですよ。それに関してはどう思われます？

●恥ずかしいから、考えないことにしている。こういった具体的な目標に関しては図書館長が考えているのだと思うけど？

図書館長：学校図書館へのサポートは考えているが、まずは市立図書館に関しての仕事が優先される。これは学校教育の方です。

●教員は異動するので地域に根付かない。そうなる地域で専門にやる組織が必要になってくる。市長がやればいいのだが…。

★ぜひそうして欲しい。

★図書館に人を置く動きは90年代になってから。町田市は出発は早かったが、周りの地域に先を越さ

れてしまっている状態。今一番成功しているのは、三鷹市。次に調布市。町田市は公共図書館がこれだけ進んでいるのに、学校図書館が足踏み状態なのはとても残念。是非公共図書館と学校図書館のネットワーク化をすべきだ。バックアップしてくれる公共図書館があることが町田の強みなのに。

★ 読解リテラシーの向上が問題になっている。いわゆる調べ学習において、ただ百科事典を与えるのではなく、どう使っていくかを教える。使える図書館が求められている。

● 今の子ども達は「読みふける」ことがあるのか？本を読む子は増えているのか？

★ 町田では、確実に増えている。人が居て、読みたい本があるようになったから、増えた。

★ 朝の10分間読書活動をしているが、その活動に対してのアンケートで、「中学になって読書が好きになった」という子どもが多い。本に目覚めてきている。保護者も子どもが読書するようになったと喜んでいる。きちんとした図書館があれば、そして手渡す人がいれば、環境さえ整えれば子どもたちは間違いなく本が好きになる。

★ 定期的に行っている都や文科省の読書量調査を見ても、増えていることが分かる。保護者に話を聞くと満足度はアップしている。

★ 学校図書館は、いじめられている子の居場所といった、あたたかい場でもある。

● それは、保健室じゃないの？

★ 今また傾向が変わってきているが、ちょっとつっぱった子が保健室で気の弱い子が学校図書館という感じ。

★ ブックスタートの活動が始まった頃の子どもたちが小学生になっている。だから、小学校の図書館の充実は今まさに大切。

★ 若い人が学校図書館で働けるようにしてほしい。なりたくて資格のある若い人は沢山いる。

★ 生徒が学校図書館の司書になりたいと言ってくるが、今の状態では、是非なるとは薦められない。

● 横浜で仕事をしていた時は、野鳥の会に入って

いたので、青少年図書館や地区センターで呼ばれて鳥の話をしていた。図書館に子どもが来るきっかけ作りをさせられていたのだね。

★ 役立つ図書館のイベントが、最近また盛り返している。以前に比べると、もっと切実なビジネス支援、病院支援などだが、教育もこれに含まれると思う。(市長・秘書課長退席)

<16:15~16:35> 指導課長と引き続き話合い

小泉: 三鷹の教育委員会で学校図書館のことに携わっていたので、今日の皆さんの話、情報センターの機能などは知っていた。三鷹でできたからと言って、

授業で出会った学生たち ④

姿勢

山本 宣親

若者の姿勢が気になる。見掛けのスタイルは良いが、姿勢が悪い。うつむき加減で「気をつけ」が出来ず、長く立ってられない。まるで骨なしのタコ。直ぐにジベタリアンとなる。

教室でも受講姿勢が悪い学生が多い。背骨が曲がっているかのように見える。その中で背筋を伸ばし良い姿勢で聞いている学生がいると、ほっとして、新鮮で貴重なものに見えてしまう。

求職の面接会場でもしっかり良い印象を与えるに達しない。日常の姿勢は、その場のぎでは改めることは出来ない。付け焼刃はすぐに見抜かれてしまうだろう。

近年、若者の姿勢が悪くなったのはなぜか。専門家は食生活や生活環境の変化を挙げている。なるほどそれもある。しかし彼らの生きる姿勢、人生に立ち向かう構えに欠けている、と私は思う。親から基本的なしつけがされず、幼児期から好き勝手に振る舞い、困難を克服するたくまさが育っていない表れである。

それ故、私は学生に熱いメッセージを送る。眠っている学生の魂を覚まし、背筋を真っ直ぐにさせるのは「真実」学問の力だと信じて。

市町村には財政規模があるので、町田ですぐできるかということ、そうはいかない。

吉野裕子の著書のすゝめ

古市静子（民話と文学の会）

去る4月18日、敬愛する民俗学者吉野裕子(よしのひろこ)先生が、91歳で永眠されました。吉野先生と私の出会いは、もう25年程前にさかのぼります。

当時私は、座間に伝承されてきた「蛇の神」について調べており、その関係で先生の著書にめぐり合いました。そして、昭和61年朝日カルチャーの講座「陰陽五行と日本の民俗」を受講したのがきっかけで、それ以来、日本人の自然観や年中行事、また祭りのことなど多くを学び深い感銘を受けてきました。

それからというもの、私は毎年の賀状にその年の干支(かんし・えと)を書きます。今年の干支は「戊子(つちのえね)」なので、「十干(じっかん)では、土の気の兄の年です。大きい事件がおきて世の中が変わっていくようです。十二支では、子の年、古いものは終わり、新しい考え方が生まれようとしています」と、書き添えました。

干支は、古代中国の陰陽五行思想から生まれた言葉で十干(幹)と十二支(枝)のことです。

十干は地上の五気(木火土金水の5原素)をそれぞれ「兄(え)=陽、弟(お)=陰」に分けてつけた名で、木気は甲(きのえ)・乙(きのと)、火気は丙(ひのえ)・丁(ひのと)、土気は戊(つちのえ)・己(つちのと)、金気は壬(みずのえ)・癸(みずのと)の十通りに分かれます。

十二支は五惑星の中で最も貴い星とされた木星の運行によっています。木星は12年で天を一周しますが、太陽や月とは逆に西から東へと移動しています。そこで木星を東から西へ移動させることにして、想像上の星「太歳(たいさい)」を設定しました。この太歳のいる場所につけた名が、子(ね)からはじまって亥(い)で終わる十二支です。十干に陰陽があるように、十二支にも陰陽があって、陽干と陽支、陰干と陰支が結びつきます。



書名: 吉野裕子全集 第12巻

「古代日本の女性天皇」

著者: 吉野裕子

A5判上製 477頁 定価 3150円

全集完結! / 「扇/祭りの原理」「日本

古代呪術/隠された神々」「陰陽五行

思想からみた日本の祭り」「蛇/狐」

「日本人死生観/陰陽五行と日本の

民俗」「山の神/神々の誕生」「五行

循環/十二支」ほか収録 人文書院

十干と十二支の結びつきは、甲子(きのえね)にはじまって癸亥(みずのとい)に終る60年で、再び甲子にもどります。60年の間に同じ年は二度となく、私たちは60年目を「還暦」として祝っています。

先生はよく「子の刻(23時~1時)には眠っているようにするといいいんですよ」と言っておられました。

ご病気になられて、入院されていると聞いて、奈良の病院へお見舞いに行きました。帰ろうとすると、「明るいうちに家にお帰りなさいね」と先生が言われたので、私は「酉(とり)の刻(17時~19時)ですね」といって笑ってお別れをしたのが最後でした。新幹線の中で「カラスが啼くから帰えろ」と歌っていた子どもの頃の夕暮れ時を思い出していました。

多くの人が18時には帰宅し、23時には眠っているように暮らすことができれば、世の中はどんなにか元気に明るくなるでしょう。

先生は、これまでに書かれたたくさんの著作を、『吉野裕子全集』として集大成し、最後の12巻の後書きを書き終えたところで、肩の荷を下ろすように息を引き取られたそうです。

最終巻はこの6月末に刊行されました。座間市の図書館にも、全巻揃えてもらいました。

吉野先生の著書の中には、天に日月と星々の気を、地に命の生成の気を感じながら、きれいな空気を吸い、きれいな水を飲んで暮らす日々を、取り戻すヒントがあるように思っています。ぜひ多くの方に、先生の著書を読んでいただきたいと願っています。(座間市在住)



＜5月例会報告＞

6/11 (水) 17:30～会報印刷
18:00～浪江氏書簡集作業
28日(水)18:25～20:00 例会
於・中央図書館中集会室

出席／伊藤 川野 久保 島尻 前島 増山
丸岡 水越 桃澤 山口洋 (守谷・吉岡：
終り頃一寸) 野角・関口(会員外)

- 嘱託職員組合の野角さんと関口さんのお二人が例会に参加して下さい、まず自己紹介から。
- 現在嘱託は65名、そのうち64名が組合に加入しているとか。町田の図書館は、図書資料費の予算減少や委託問題などさまざまな政策問題を何とかクリアしようと、嘱託職員に依ることでカバーしてきた。市民の目から見ても、嘱託の方たちの力が図書館を支えていることが分かる。しかし、病気・介護・育児等の休業もなく、働き続けたくてもやむを得ず辞めていかねばならない状況下に置かれている。そのため、自分たちの職場を働きやすいものにしようとする組合を結成(会報125号参照)、当局との団交もしているという。2011年には、嘱託と職員の数が逆転し嘱託の方が多くなるというから、嘱託の方が何の不安もなく仕事に精を出せる保障は必須である。次々と新人が入ってきて最初からやり直さねばならない職場は、効率が悪く結局は人件費の無駄遣いに通じる。図書館は、専門性を重要視した職員体制で、自治体がしっかり運営して欲しいものだ、とは全員の意見でもあった。
- 荒川区は職員は館長のみ1人で、あとはすべて嘱託。実質的にはとても直営方式とはいえない内容である。職員がいて、嘱託がいて、お互いに質を上げるやり方が良いと考える。
- 「靖国」という映画を見た。どちらにも偏らず、記録で事実を上手に伝えている。良い映画だった。
- 5月25日(日)13時～17時、文京区シルバーホールにおいて全国図書館友の会第2回総会が行われ、全国から19団体39名、個人会員6名、オブザーバー参加1名の計46名が集った。総会25名程が国会でのロビー活動を行った。
- 7月2日かえで文庫のたなばた会 15:00— 大型

「東京で見られるホテル」—スライドとお話—

講師：小俣軍平氏(陸ホテル研究家) 資料代300円
7月27日(日)13:30～16:00 中央図書館6Fホール
野津田雑木林の会・町田の図書館活動をすすめる会
共催、市立図書館協力 ☎045-961-5045 久保

2008年度 第4回 文学館(主催)で楽しむ

おとなのためのおはなし会

7月17日(木)10:30～11:30
町田市民文学館 2F大会議室

プログラム

八木重吉 * 佐藤さとるの作品から	税所
「あの坂をのぼれば」(杉みき子作)	税所
「さるの生き胆」(日本の昔話)	定岡
「ユルマと海の神」(フィンランドの昔話)	西村
＜語り：まちだ語り手の会＞	



絵本、紙芝居などをする。

- 6月25日18:00～「たべものや熊」にて「手嶋・守谷両氏を囲む会」を行う。会費は¥5000。〈⇒当日参加者：手嶋・守谷・吉岡・大野・黒田・中山・野角・関口・伊藤・片岡・久保・小寺・島尻・広井・前島・丸岡・水越・桃沢・山口・増山(以上20名)〉

【お知らせ】

「立川の図書館を考える会」が市議会に「図書館のあり方について、市民の声を踏まえて十分検討する事を求める陳情」を提出。6/13(金)の市議会文教委員会、19日(木)の本会議で採択された。

★立川市図書館30周年記念事業／7/24(木)13:30～16:30／記念講演「市民とともに歩む図書館」講師：手嶋孝典氏(前町田市立図書館長／トークセッションまとめ役：斉藤誠一氏(元立川図書館職員)／7/23～271Fロビーで「立川図書館の30年」を記念展示／問：立川市中央図書館(042-528-6800)

★学校図書館連続講座／8/24(日)9時～16時半／3講座①山本さゆり(荒川区・司書教諭)②高桑弥須子(市川市・小学校司書)③田島佳子(本会会員)+交流会/実践女子大学香雪記念館2階多目的室(日野駅歩12分)/資料各回千円、全講座3千円
／申込・問合：加藤(042-592-2019)／主催：日野市の学校図書館をもっとよくする会

★学校図書館支援講座／8/31(日)10時～16時半(4講座：①ブックトークいろいろ、②交流会、③学校図書館の「人」を考える、「読み聞かせ」をもっと楽しく)+交流会／八王子市中央図書館／資料代 各回500円 定員30名／申込・問合：篠原(042-635-7756)／主催：八王子に学校図書館を育てる会

あとがき

ミニダックスが我が家に来て5ヶ月。いたずらは花盛りだが、物言えぬ感受性が、飼い主の心を優しくしてくれる。全ての命が愛おしく感じられるようになったから不思議。ちょこまか動き体重も少し減った。(M⁴¹)